

I 研究の経過と概要

東山梨地区 保護者・地域住民との提携部会

1. 研究テーマ

「開かれた学校づくりをめざして」

子どもたちの抱えている問題やその背景にある社会・地域の課題を明確にしなが、子どもたちが一人の人間として社会的自立を果たしていくためには、学校・家庭・地域社会がそれぞれの責任を明確にするとともに、それぞれを補完し合いながら地域全体で子どもの成長を支えていくことが必要である。また、学校のあり方を見直し、「学校が地域社会へ参画する」をめざし、「地域とともにある学校」＝「開かれた学校」づくりに取り組まなくてはならない。

昨今、学校では、外部講師の依頼、保護者・地域住民などを対象に行う学校評価・授業評価、学校評議員制の流れを汲む組織の設置等、学校運営に関して外部の声を取り入れることが増えている。教育基本法には「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。」との規定（第13条）が置かれた。また、学校教育法では、「小学校は、当該小学校に関する保護者及び地域住民その他の関係者の理解を深めるとともに、これらの者との連携及び協力の推進に資するため、当該小学校の教育活動その他の学校運営の状況に関する情報を積極的に提供するものとする。」と定められた（第43条 中学校にも準用）。さらに、学習指導要領の中にも、学校・家庭・地域住民相互の連携及び協力の必要性に関する記述が多い。これらのことは学校と地域・社会・保護者との連携の必要性が高まっているからと思われる。

学校は地域社会を離れては存在し得ないものであり、児童は家庭や地域社会で様々な経験を重ねて成長している。本研究会では「開かれた学校づくりをめざして」学校を開くことの意味を問いながら、地域・保護者との関わり方を学び、そのことが子どもの成長、学校の成長、地域の活性化に生かされるような取り組みについて検討していきたい。

【研究の方向性】

- I 学校と地域・保護者との関わり方・連携の方策について
- II 学校・子どもたちが地域の人々や保護者とのつながりを生み出す実践
- III 研究の成果の共有（情報の発信も視野に入れる）

2. 研究内容・方法

①部員によるレポート報告をもとに討議し、研究を深める。

各自、各校の実践を通して、子どもたちの変容の様子、問題点、悩みなどを提案し、それについて討議する。

②保護者・地域との連携について、授業実践を通して、研究を深める。

③常任講師の先生方には、常時ご助言・ご指導をいただくとともに、保護者・地域との関わりや連携について情報提供していただく。

④夏季学習会では、講師を招聘しての学習会並びに郷土に関わる施設等の隣地研修を通して、研究を深める。

3. 研究組織

部長	渡邊由美子（松里小）
副部長	新海小緒里（大和小） 武藤有希（笛川小）
世話人	古屋真吾（大和小）
常任講師	古屋真吾（大和小） 新藤 徹（塩山北小） 岡 正人（菱山小） 窪田正幸（大和小）

研究メンバー 野尻あや子（塩山南小） 雨宮加代子（塩山南小）
清水新果（塩山北小） 鈴木百合子（塩山北小）
倉田和美（勝沼小） 堀内友貴（勝沼小）
柏原健仁（菱山小） 武井麻子（菱山小） 大村えり（期菱山小）
飯室美華（大和小） 加々美教子（笛川小）
那須美佳（笛川小）
丸山正史（勝沼中） 立川慶樹（山梨南中） 計21人

4. 年間計画

	月 日	会場	司会	記録	内 容
1	5. 10	塩山南小			研究テーマ，研究内容・方法の決定
2	5. 24	松里小	笛川小	山梨南中	年間計画・授業者の決定 県教研の報告
3	6. 14	松里小	山梨南中	塩山南小	発表：（笛川小）（勝沼小）
4	7. 31	塩山北小	塩山南小	塩山北小	夏季学習会 ① 研修会・臨地研修 ② 授業案検討
5	8. 30	勝沼中	塩山北小	勝沼小	統一授業研 授授業研究：勝沼中 丸山正史先生
6	9. 20	塩山南小	勝沼小	菱山小	秋季教研

					発表：(大和小) (松里小)
7	11. 29	松里小	大和小	勝沼中	発表：(菱山小) (塩山北小)
8	1. 10	松里小	菱山小	大和小	発表：(山梨南中) 塩山南小授業案検討
9	2. 7	塩山南小	勝沼中	笛川小	統一授業研 授業研究：塩山南小 雨宮加代子先生
10	2. 14	松里小	笛川小	菱山小	冬季教研 今年度のまとめ

5. これまでの研究の歩み

【第1回 5月10日】テーマの決定

【第2回 5月24日】年間計画、授業者の決定、春季教研の報告

【第3回 6月14日】実践発表

- ・5年家庭科「みんなで作ったお米を使っておにぎりをつくろう」(勝沼小) ほか学校支援ボランティア・親子活動の様子等
- ・1年生活科「むかしのあそび大会」(笛川小) ほか児童会活動・読み聞かせ・親子活動の様子等

【第4回 7月31日】

- ・授業案検討 2学年道徳「ワインにかけた2人」 勝沼中 丸山正史先生
- ・先進校による学習会「学校・地域・家庭の連携のあり方コミュニティスクールの創造から」(講師：双葉西小学校職員)

【第5回 8月30日】統一授業研

- ・研究授業 勝沼中 丸山正史先生 中学2年生道徳「ワインにかけた2人」

【第6回 9月20日】秋季教研 実践発表

- ・基本的生活習慣の確立のための家庭との連携(大和小) ほか基本的生活習慣の確立のための家庭との連携、保・小・中の連携等
- ・町探検から地域の人とつながろう(松里小) ほかPTA行事・児童会行事・学年行事等

第2学年C組 道徳指導案

東山教協・保護者・地域住民との提携部会 H29.8.30(水)

授業者 丸山 正史

学習者 第2学年C組生徒28名

1. 主題名 「勤労と奉仕の大切さ」 内容項目 4-(5)

2. 資料名「ワインにかけた2人」(出典:「山梨県道徳教育用郷土資料集」)

3. 主題設定の理由

(1) ねらいとする価値

勤労は、人間生活を成立させる基本的な要件である。一人ひとりがその尊さやその意義を理解し、公共の福祉と社会生活の発展・向上に貢献することが求められている。

郷土でワインづくりに携わっているゲストティーチャーの話を通して、勤労の尊さを重んじる生き方を基に、奉仕の精神をもって自ら進んで、それを実践しようとする態度を育みたい。

(2) ねらいにかかわる生徒の実態

生徒は明るく元気であり、仲も良い。各班内での係の仕事等も、分担し、自分の役割を果たすと共に、協力して取り組んでいる。さらに、行事の取り組み等、これぞという時には、よく協力し合える集団である。

勤労ということに目を向け、清掃のことを考えてみると、時間前行動等、時間を意識して取り組もうとする意識は高く、担任や清掃担当の指導や声掛けの下で毎日、真面目に取り組んでいる。しかし、自主的に取り組もうとする意識や徹底してやり遂げようという意識については、改善の余地があり、無言清掃で隅々まできれいにしようという意識について高めていく必要があると思われる。

そういう状況下、「勤労」ということと、「勝沼という地域性」を考え、それらのことに適した「読み物教材」を通し、そして、それらのことに深く関わっているゲストティーチャー(生徒の保護者)の話を通し、11月に行われる「職場体験」へ向けての意識の高揚へつなげると共に、自分たちの地域、「勝沼」により誇りを持ち、今後も大切にしていこうとする気持ちへもつなげていきたい。

(3) 資料について

勝沼、山梨、日本の今後・未来のために、二人で未知の重大な任務に挑み、障壁を乗り越え、ワイン作り貢献していく話が掲載されている。道徳の本校年間指導計画におけるこの時期の指導内容である「勤労」(11月の職場体験へとつながっている)ということに関しても、ぶどう・ワインという、「勝沼という地域性」ということを考えてみても、「勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神を持って、公共の福祉と社会の発展に努める」という主題に適した資料であると思われる。

(4) 道徳的価値及び人間としての生き方の自覚を深め、道徳的実践力を育成するために活用した手だて
《魅力的な教材の開発や活用》

＜「勝沼におけるワイン普及の歴史に関する資料」と地域人材の活用について＞

山梨県教育委員会作成の「山梨県道徳教育用郷土資料集」を活用し、日本初のワインの開発やその後の普及に尽力した、勝沼の2名の先人についての物語を扱うことで、「勤労奉仕」の気持ちと「地域を誇りに思う」気持ちの、どちらも実感できるようにした。

さらに、その物語から現在のワイン作りへとつながる、地域のワイナリーの専務(生徒の保護者)の話を聴くことで、それらの気持ちをより強め、11月の職場体験や今後の進路学習へとつなげていくことも考えた。地域の方(保護者)が直接、生徒に語りかける体験談や願いは、生徒の心に強く訴えるものであると考えられる。

(5) ゲストティーチャーについて

麻屋葡萄酒(アサヤワイナリー)専務を務める、雨宮一樹さんをお招きし、お話しをお聴きする。

雨宮さんは授業者が新採用時の平成3年度における勝沼中3年生で、サッカー部員であり、授業者はサッカー部顧問であった。

アサヤワイナリーで働きながら、地域貢献にも尽力している。具体的には以下のとおりである。授業では、ワインづくりに関する苦労話や地域貢献の話を聴き、その感想を「勤労・奉仕について今後できること」の記入や職場体験や職業への意識の高揚へとつなげていければと考える。

雨宮さんは、H26年度から現在にかけて、山梨県ワイン酒造協同組合副理事長を務めている。H22年にはワインツーリズム実行委員長を務めたが、これは甲州市出身者としては初めてであった。H25～H28年度においては、甲州市商工会青年部長を務めた。山梨青年会議所でも14年間活動し、甲州市消防団勝沼分団5、6部においても部長を務めた。

4. 本時のねらいと授業日時・場所

ねらい: 勤労について、奉仕の精神を持って公共の福祉に努める態度を育てる。

日時: 平成29年8月30日(水) 14:00～14:50

場所: 甲州市立勝沼中学校2年C組教室

5. 展開

過程	学習活動と主な発問	学習の様子を見取る視点	指導上の工夫・留意点
導入 5分	1 資料の内容、本時の学習内容を知る。 ○本日の目標を提示「働くことについての自分の考えを持つ」 ○自分の仕事なのに、できなかった仕事はありますか。	◇これまでの自分の仕事を振り返ってみる。	○2年生になってからの清掃のことや学級内での係の仕事等について考えさせる。
展開 前段 25分	2 資料「ワインにかけた2人」の内容を振り返る。 ・ワインにかけた2人 〈事前に読み、内容を頭に入れておく。〉 ○「ああ、もう引き返せないのだ、なんとかこのことをやりきるしかないのだ、と思った自分」というところが教師の印象に残った部分だと伝え、「今の勝沼の基礎を築いた2人だが、その時、なぜそんなに頑張れたのか」と問い掛け、「地域のため、支えてくれた方々のために頑張れたんだろうね」と話す。 ・「勝沼のために、という奉仕の精神をもつての勤労」について学ぶ 3 ゲストティーチャーの話を聴く。 〈資料内容を受けてのワインづくりの話、地域貢献や仕事での苦労話等をしていただく。〉 4 「働くことやボランティアについての雨宮さんの考えについてどう思ったか」をワークシートに書き、伝え合う〈個→班〉	◇人々の想いを背負い、苦難を乗り越え、勝沼の基礎を築いた2人の様子を読み取っているか。 ◇プリントに、勤労の尊さや意義について、あるいは、公共の福祉に対する気持ちについて書こうとしている。	○プリント事前配布(読ませておく) ○奉仕の精神をもつて今の勝沼の基礎を築いた2人のことについて再確認する。 ○勝沼の良さや誇りに思うこと(ジベ実習・ぶどう祭り聖火隊等)も振り返らせながら書かせる。
展開 後段 15分	5 「あなたが勤労・奉仕について、今後、できることは何・どんなことですか」という発問を受け、自分にできることを記入する。	◇何人かの生徒を指名発問し、ゲストティーチャーのコメントも入れながら、お互いの想いを共有する。	○勤労の尊さや意義について考えられるようにすると共に、働くことについての理解を通して職業についての正しい考え方を育てることや公共の福祉に努めようとする態度を育てる。
終末 5分	6 今日の学習をまとめる。 ○教師の説話を聴く。 ○今日の授業の感想を書く。	◇話をしっかり聴こうとしている。 ◇今日の授業を振り返り、感想を書こうとしている。	○勤労の尊さや意義、公共の福祉について、再度、考えさせる。

- 6 本時の評価(期待する姿)
- ・勤労について、奉仕の精神を持って公共の福祉に努めるという考えを持つことができたか。
 - ・自分たちの地域に誇りを持ち、今後できることについて自分の考えを持つことができたか。
 - ・11月に行われる「職場体験」へ向けて、意識の高揚を図ることができたか。

- 7 継続する事後指導
- ・毎週金曜日の午後に行われる、「総合的な学習の時間」の時間の中で、11月実施の職場体験へ向けての取り組みが進んでいくことになるが、この道徳の時間で感じたことや書き込んだ意見を基にし、勤労の意義を考えたり、職業の大変さややりがい・責任をもつことの大切さを学ぶ。
 - ・職場体験を通して、自らの進路や、将来の生き方を考える。

- 8 資料
- ・「山梨県道徳教育用郷土資料集(平成24年3月山梨県教育委員会)」

8/30 (水) 東山教協・「保護者・地域住民との提携部会」における研究授業 (道徳) の流れ

※挙手発問ではなく、順番もコーディネート。「指名発問」にする。

※プレ授業は前日、8/29 (火) に、2B (3校時) と2A (5校時) で行う。

(ゲストティーチャーについては、直接来校していただく)

ゲストティーチャー：④雨宮一樹さん (麻屋葡萄酒株式会社専務)

[発問0] 「自分の仕事なのにできなかった仕事はありますか。」 (5分間)

例：掃除、日直、あいさつ運動、水やり等

「ワインにかけた2人」については事前[当日の朝読書の時間]に読ませておき、簡単に内容を

振り返る <教師の印象に残ったところを伝えたり、「なぜそんなに頑張れたのか」と問い掛け、

「地域のため、支えてくれた方々のために頑張れたんだろうね」と話す。>

※「奉仕の精神をもつての勤労」について学ぶ

ゲストティーチャー[麻屋葡萄酒株式会社[アサワイナリー]専務・雨宮一樹さん]のお話 (15分間)

<苦労話をメインに話していただく。> ※来校→お話していただく。

[発問1] 「働くことやボランティアについての雨宮さんの考えについて思ったこと」をワークシ

ートに書き、伝え合う<個→ペア→班>

(10分間)

※「勤労の貴さや意義を自覚し、公共の福祉のために尽くそうとする態度の育成」へと

つなげる。

[発問2] 「あなたが勤労・奉仕について、今後できることは何・どんなことですか。」 (15分間)

※ゲストティーチャーからのコメントもいただきながら、「勤労の貴さや意義を自覚し、公共の

福祉のために尽くそうとする態度の育成」へとつなげる。↓

教師の説話 (あいさつ運動、グラウンド整備、地域の育成会や消防団のこと等、話をする。)

振り返り：授業の感想を書く。

(5分間)

板書計画について ↓

・「印象に残ったこと」 〈個↓班〉	・「働くことについての自分の考えを持つ」
・あなたが勤労・奉仕について今後できることは、何・どんなことか。	・自分の仕事なのにできなかった仕事はあるか。
・「雨宮一樹さん」のお話	・「ワインにかけた二人」
・ゲストティーチャー	高野正 ^{まさなり} 誠さん、 土屋助次郎 ^{すけじろう} (竜 ^{りゅう} 憲 ^{けん})さん

ワインにかけた二人

2年 組 番氏名

(1) 働くことやボランティアについての雨宮さんの考えについてどう思いましたか。

Memo(班の仲間の印象に残ったこと)

()さん…

()さん…

()さん…

()さん…

()さん…

(2) あなたが勤労・奉仕について、今後できることは、何・どんなことですか。

(3) 今日の授業で感じたことや思ったことを書いてみましょう。

8/30(水)「保護者・地域住民との提携部会」における研究授業(道徳)後の研究会において出された質問及び意見

質問

- ・雨宮さんとの打ち合わせはどのくらいの頻度で何回くらい行ったか。
→8月に1時間半ほど打ち合わせを行い、前日の8月29日(火)にプレ授業を2回行った。プレ授業を振り返り、その夜に40分ほど打ち合わせを行った。
- ・生徒が資料を事前に読んでおくということは、中学校ではよくあるか。
→授業内だとゲストティーチャーの話が薄くなってしまうので、前日の朝読書の時間15分間の中で読み、さらに研究授業直前に再度読んでおいた。
- ・2年C組の雰囲気はどうか。
→仲が良く、協調性もあり、よく結束している。リーダーが力を発揮している。自主性にはまだ課題がある。

意見

- ・班で交流したことで、テーマを再確認することができた。
- ・個→班→全体という中で、新しい意見や考えが生まれた。
- ・中学校ではあまりゲストティーチャーを招くケースは少ないように思われる。貴重な機会なので、生徒からゲストティーチャーへの質問の時間があっても良かったのではないか。
- ・ゲストティーチャーの話が分かりやすく興味を惹く内容だった。加えて、雨宮さんがなぜワイナリーを経営しているのかということや、とてつもないスケールの話等があるとさらに良かったのではないか(例:そのブドウ園の葡萄が全部ダメになってしまった年もあるという話等)。
- ・中学生にとって、実際に働いている自分たちの先輩である保護者の方が語り、話してくれることは、大変貴重な機会となったのではないか。
- ・ワークシートの「感想」の欄には郷土愛を感じられることが書いてある生徒もいたが、それでも良いと思われる。そういう中でも「勤労・奉仕」という観点にも触れられていて良かった。
- ・学園祭や職場体験に向けての気持ちをワークシートに書いていた生徒もいたので、目標が達成できていたと思われる。
- ・生徒のワークシートには「働くことの大切さや大変さ」が書かれていた。また、地域の方々のことも考えることができていたと思われる。
- ・最後の教師の説話により、生徒は「勤労・奉仕」についてより強く実感することができ、とても良かったと思われる。
- ・授業者の正直な人柄がにじみ出ていて、とても良い雰囲気で授業をすることができていたように思われる。
- ・ゲストティーチャーや授業者の「勤労・奉仕」観を伝えることにより、生徒の理想や目標、自分自身を見つめ直し、再確認するための基礎になったように思われる。生徒は「奉仕」といった考え方も持つことができていたと思われる。
- ・「お客さんや生徒に喜んでもらえた時や笑顔が見られた時が一番うれしい」とゲストティーチャーや授業者から聴いたことにより、生徒は、大変さ・つらさに加えて、やり甲斐・生き甲斐についても考えることができたのではないか。
- ・ゲストティーチャーはとても新鮮。ワインづくりの話を通し、地域のサポートなくしては働いていけないということが生徒に伝わったと思われる。
- ・教師自身が自分のことを語るということも大切。
- ・勤労・奉仕というテーマで授業が進んでいた。授業者の人柄が出ていた良い授業だと思われる。
- ・小学校と中学校の違いを見ることができた。ゲストティーチャーの重要性を改めて感じることもできた。生徒に失敗談を語らせることも良かった。欲を言えば、ゲストティーチャーと生徒とで生の対話があっても良かったと思われる。

ワインにかけた二人

2年C組 番氏名

(1) 働くことやボランティアについての雨宮さんの考えについてどう思いましたか。

地球のためには多くの人の仕事を11月のほかはニバイト感
自分だけなくたく人の人が聞かなくて、お人の人が
よくしつうという強い思いがあるからそのお人の人が
感じた。自分だけなく周りの人を考えることの大切さ

Memo(班の仲間の印象に残ったこと)

ワイン

- () さん... お客の笑顔にやりがいを感じ、大変なことで
続けたいという思い
- () さん... びじうからアム造りまでの過程の大変さが分かった
- () さん... アム造りの管理をしていくことは大変だけれど
17歳の頃は日によって思った
- () さん... アム造りはとても大変なことで多分、お客
の笑顔のためには懸命に頑張りたいと思えた。
- () さん...

(2) あなたが勤労・奉仕について、今後できることは、何・どんなことですか。

奉仕にはアム造りは、困っている人がいるから助ける。自分から
仕事をする。困っている人のことを考える。
知ること、自分で自分と向き合える仕事に就く。

周囲との関わりを大切に、自分がやりがいを覚えること

(3) 今日の授業で感じたことや思ったことを書いてみましょう。

今日 授業で、様々なものの作りかたを
知り、アム造りというものが、
とても大変そうだな、頑張りたいと思えた。

ワインにかけた二人

2年C組 番氏名

(1) 働くことやボランティアについての雨宮さんの考えについてどう思いましたか。

客が笑顔でいるのは、自分の仕事で、
お客様が笑顔でいるのは、自分の仕事で、
地球を助けるのが、自分の仕事で、

Memo(班の仲間の印象に残ったこと)

- () さん... アム造りというものが、地球のためには、
大変な仕事で、
- () さん... アム造りというものが、地球のためには、
大変な仕事で、
- () さん... アム造りというものが、地球のためには、
大変な仕事で、
- () さん...
- () さん...

(2) あなたが勤労・奉仕について、今後できることは、何・どんなことですか。

アム造りというものが、地球のためには、
大変な仕事で、

周囲との関わりを大切に、自分がやりがいを覚えること

(3) 今日の授業で感じたことや思ったことを書いてみましょう。

今日の授業では、アム造りというものが、
とても大変そうだな、頑張りたいと思えた。

2017年8月30日

勝沼中学校 道徳指導案 『勤労と奉仕の大切さ ～ワインにかけた2人～』

『ワイン造りを通じた苦労話など。』10～15分間

ゲストティーチャーの自己紹介（3分間）

勝沼町の等々力にある麻屋葡萄酒の雨宮です。わたしも26年前、勝沼中学校でお世話になりました。今年で41歳になります。娘がいつもお世話になっております。今回は丸山先生とのご縁で、このような機会を頂きました。丸山先生とはH3年度ですかね、新任で勝沼中学に赴任された時、サッカー部の顧問で私が中学3年でご指導を頂いてからのご縁になります。長坂教頭先生も1.2年生の時のサッカー部の顧問でお世話になりました。非常にご縁を感じております。本日は宜しく申し上げます。

私はワインを造って売っていく仕事以外にも地域の活動として地元の消防団で火災予防の活動をしたり育成会で子供たちと地域のお祭りの準備や行事に参加したり甲州市商工会青年部に所属してお祭りに出展したり、地域の清掃活動や地域の魅力を発信していく活動もしています。

導入部分（3分間）

ワイナリーの概要

全国では約240社、山梨県で約80社あり全国の3分の1を占める産地。そのうちの40社が甲州市に密集している非常に珍しい特異的な場所である。理由としてはやはりぶどう栽培に関して歴史的に長く行われており、収穫される葡萄の量も豊富にあったという背景がある。地理的にも葡萄をはじめとする果樹栽培に適した地域です。また、高野さんや土屋さんによる功績も大きく、二人は自分たちの為だけでなく地域のワイン会社の指導的な役割を担って今現在の発展に大きく貢献したと思います。

ワイン造りの概要

ワイン造りは時期が限られています。一年のうち8月中旬から11月下旬くらいまでの約3か月間、丁度今の時期、市内のワイナリーは葡萄を収穫してワインを造って行く忙しい時期に突入して来ました。限られた期間にしか造ることが出来ないのも一年一年が勝負。ブドウ栽培も一緒ですね。

また、他の酒類と違うところは水を加える作業がないところ。葡萄の特徴を私たち造り手が見極めてどういうワインにしていこうかという事が重要です。また、葡萄の出来栄がワインの品質に大きく影響します。

本題部分 (5 分間)

ワイン造りの大変さ

良いワインは良い葡萄からといわれます。葡萄づくりは天候に左右されることも大きいです。相手は自然。2016年は9月に雨が続いた天候で葡萄を収穫出来なかった畑もありました。2014年にはこの勝沼町でも大雪による被害が多く出ました。ハウス栽培の施設が倒壊したり、ぶどう棚がつぶれてぶどうの木も枯れてしまったりしました。その様な時それぞれの地域の人が協力し合って自分の畑だけでなく他の人の畑の復旧にも携わり驚異的な速さで復旧が進められた事は地域の連帯感、強みを感じました。

今年の様な天候も少し難しい年。収穫時期に雨が多いと粒が割れたり、病気にかかったりと健全な葡萄が収穫しにくい。人間と同じで病気にかからないように畑の環境と整えて前年の状況など参考にしたり栽培管理をしていく必要がある。5月～今ぐらいの時期は早朝4時とか5時の暗い時間から消毒作業をしたり、葡萄の房に雨が当たらない様に一房一房笠懸けをするなど暑い時期に時間のかかる地道な作業をこなしていきます。

葡萄農家さんとの協力も不可欠。ワイナリーだけで葡萄を造っているのではなく、ほとんどのワイナリーは農家さんからも葡萄を購入してワインを造っている。実は(持ちながら説明する)このワインの葡萄生産者さんはこの学校の天野秀太郎先生のご両親が造っています。ラベルに名前も入れさせて頂いています。

醸造工程に関しては葡萄果汁の発酵管理が非常に重要。特に温度管理。発酵中は葡萄の風味を大切にしながら定期的に温度管理をして目的とするアルコールが出るまで(ワインになるまで)気が抜けない。また、熟成管理も大切。ワインは酸化に弱いので樽熟成中や瓶詰したワインの熟成管理もお客様に届くまでしっかりと管理することが大切。それらの事が苦労話といえそうですが良いワインを造るためには必要不可欠なこと。そうやって自分たちが愛情込めて造ったワインがお客様に美味しいと言ってもらえたり、コンクールで賞を受賞させてもらったりした時はやりがいや喜びを感じます。

まとめ部分 (4 分間)

ワインは地域の産物。葡萄を造る人、その葡萄を使ってワインを造る人。ワインを売る人ワインを飲む人。それぞれが輪になって支えあっている。

ぶどうの丘や勝沼の駅からみえるぶどう畑が広がる景色は地域のたからもの。私たちが住んでいる地域の当たり前の景色が県外から訪れる人々にとっては特別なもの。感動させる景色がある。

勝沼中学校の皆さんもジベ処理実習やぶどう祭りの聖火リレーなどに参加して地域を盛り上げる一端を担っていますね。自分達の地域に誇りを持って益々活躍してもらいたい。

最後に私にとってワインを造るという仕事は『生きがいや、やりがい』を感じるものです。苦勞することや失敗することもあります積極的にチャレンジする気持ちをもってそういう事を乗り越えて美味しいワインが造れた時の喜びや充実感が『生きがい』につながります。また、自分たちのワインを飲んでくれる人が美味しいと言ってくれて喜んでいる姿を見ることが『やりがい』になります。

皆さんも自分の好きなこと興味のあることの中に『生きがい』や『やり甲斐』を見つける様に自分から進んで家族・地域そして周囲の仲間の笑顔や喜びの為に一生懸命頑張れるような仕事やボランティア活動に取り組んでみましょう。

教師の説話 (2分間)

【丸山先生は今から26年前の平成3年4月に就職し、新採用で勝沼の先生となり、今日ここにいらっしゃる雨宮一樹さん(当時中学3年生)と出会いました。今から8,9年前の平成20年度と21年度の2年間は山梨県庁生涯学習文化課で、県内の芸術文化の発展を目指し、働きました。】

丸山先生は現在勝沼中6年目で、英語の先生、生徒指導主事、2年副主任、野球部顧問等の役割を務めています。1,2年生5クラスで英語を教え、午前中は全て授業であり、職員室へもほとんど戻りません。そして、いつも生徒みんなの安心安全のことを考えています。みんなの登下校時に自分からあいさつ運動を行っています。2年生の会計担当もしています。野球部はいつも校庭を使わせていただくので、校庭をきれいに保つために、時々軽トラでグラウンド整備したりもします。自分の地域である山梨市八幡地区では、消防団の役員(分団役員)や育成会長も務めています。山梨市内の火事には必ず駆けつけ、子供クラブの行事には必ず顔を出します。仕事仲間や地域の仲間と力を合わせ、チームとして結束し合っていることは言うまでもありません

毎日毎日けっこう忙しいですが、楽しくて仕方ありません。とてもやり甲斐があります。自分の生き甲斐かな。なぜかと言うと、みんなや先生方、保護者の皆さん、勝沼や山梨市八幡地区の地域の皆さんの笑顔や喜びのために働いていると思っているからかな。これからも頑張るね。お互いに頑張ろう。

ワインにかけた二人

「フランスへ行つてぶどう酒醸造じょうぞうを学んで来てくれないか。」

明治十年、突然の話に高野正誠たかのまさはりと土屋助次郎つちやすけじろう（後の名前を竜憲たつのりという）は驚いていた。当時、正誠は二十五歳。若かつたが、すでに父にかわつて戸主であり、その年の五月七日の山梨県初の県会議員に選出されているほどの人物であつた。土屋助次郎、十九歳。父の勝右衛門しょうえもんは八月に設立されたぶどう酒醸造会社の設立発起人の一人であつた。二人ともぶどう酒醸造の会社がつくられることは知つてはいたが、自分たちがフランス留学に選出されようとは思つてもみないことであつた。

二人はじつと考え込んだ。フランスという国はいつたいどんな国なのだろうか。フランス語がまったくわからない自分たちが行つてぶどう酒醸造の技術を一年で学んで帰つて来られるだろうか。二人の心は大きな不安でいっぱいだった。

このぶどう酒醸造会社の設立には実に多くの人たちが出資していた。近在の村だけでなく、山梨県内の有力な豪商、豪農の人たちが株主となつていた。その出資金の四分の一近くに当たるお金が二人のフランス留学の費用としてあてられることになつていた。多くの人のこの事業に寄せる期待が感じられ、不安はますます大きくなるばかりであつた。

出発の準備もあわただしく、高野正誠と土屋助次郎はその年の十月十日、横浜港を出港した。この時にフランスへ二人を連れていつてくれたのは、当時の駐仏大使であつた前田正名まえだせいめいという人であつた。二人のフランス滞在中たいざい、良き相談相手になつてくれた人だった。

四十五日間もの長い船旅の末、二人は十一月二十四日にフランスのマルセイユに到着した。そこからパリに行き、

*前田正名：当時の官僚で外務省、内務省に勤務。明治十一年にパリで開かれる万国博覧会の事務官長として渡仏しようとしていた。

そこで一か月間フランス語を学んだ。フランス語を学ぶために二人がもっていったのは東京で買った木版の和仏辞典だけであった。そして、年の暮れも迫った十二月二十七日、パリから東南百五十キロメートルのところにあるトロワ市の農園で、二人の研修が始まった。

二人が抱いていた不安どおり、フランス語はほとんどわからなかった。しかし、二人は農園で働く技師や雇い人とともに働き、ぶどうの木の栽培方法や接木の技術を学んだ。

やがて、実習が始まって五か月が過ぎようとしていた。日本を出発する前に会社と約束した一年の期限が迫ってきた。二人はしだいにあせりの気持ちをもちようになっていた。

「一年では短すぎる。私たちはかんじんのぶどう酒醸造の実際をまだ見ていない。」

「一年間でぶどう酒醸造の研修をしてこいというこの計画そのものに無理がありますよ。だって、私たちが帰らなくてはならない十月から今年のぶどう酒醸造が始まるらしいですよ。」

いつもはお互いにぐちをこぼすことはなかったが、つい口にてしてしまった。フランス語もまだよくわからなかった。農園の人たちがいっしょうけんめい教えてくれていることがわからない、こちらが聞きたいと思ってもうまく伝わらない、まったく私たちが豚のこどものようなものだ。そう言って二人はためいきをついた。



フランスで実習している二人

フランスへ来てからこれまでお互いに必死になってぶどう栽培の技術を学んできたが、このままでは中途半端な研修になってしまいそうで、二人にとって重苦しい日が何日か続いた。

正誠はぶどう酒醸造会社を設立した多くの人々の顔を、出発の日見送ってくれた村の人々の顔を、そしてその向こうに広がるなつかしい村の風景を思い出していた。それから、ただ広い海だけで他には何も見えない船の上で、ああ、もう引き返せないのだ、なんとかこのことをやりきるしかないのだ、と思った自分を思い出していた。

助次郎もまた遠くをみつめるように、じつと考え込んでいたが、やがて正誠の方へ顔を向けた。

「正誠さん、どうしましょうか。このまま帰国することはできないと思いますが……。」

「そうですね。このままでは私たちがここへ何をしに来たのかわからなくなってしまいましたね。約束の一年という期限が守れなくても、とにかくぶどう酒醸造を見ていくために、なんとか留学の期限をあと少し延ばしてもらえないか、考えてもらいましょう。」

二人は、フランスへ来た時、連れてきてくれた前田正名に相談した。この人が会社との間に入って話をしてくれたおかげであと半年間の留学延長が認められた。ただし、あと半年間の留学の費用は二人が帰国してから会社に支払うというきびしい内容のものではあった。

秋、ぶどうの収穫と醸造の研究が心おきなく続けられることになって、二人はいきいきと実習に取り組んだ。ぶどうの取り入れから醸造の過程をくいいるようにして見て、できるだけ細かく記録した。

帰国後、二人はさっそくぶどう酒醸造に取りかかった。日本で初めてのワインが作られるのである。この時に醸造されたワインが今も残っている。

その後、二人はそれぞれ醸造場の建設、醸造用のぶどうの栽培、醸造の研究に何年も取り組まなければならなかった。フランスへ行ってぶどう酒醸造を見てきたとはいえ、まだ、醸造の基礎において研究不足であった。また、当時の日本ではぶどう酒が医薬用として利用されていただけで、現代のようにワインが一般では飲まれていなかった。そのため、販売市場を開拓していくことも必要だった。課題は多かったが、多くの人たちとともに二人はそれぞれの方法でぶどう酒醸造とその普及に取り組み続けた。

甲州市勝沼町のぶどうの丘センターに登るとそこから一面のぶどう畑が見える。ぶどう棚の葉が風にそよいでさらさらとゆれる様子は、まるで大海原のさざ波のように見える。そして、ここ甲州市勝沼町は今では日本でも有数のワインの産地となっている。

百二十年も前にここからフランスへと渡っていった高野正誠や土屋竜憲に、今ここから見える景色はどんなふうに映るだろうか。



当時の勝沼の醸造場の様子（ぶどうの搬入風景）